

災害弱者に対する支援研究ミーティング

主催：神戸大学都市安全研究センター

日時：平成24年8月18日（土）14:00～17:00

場所：仙台青葉カルチャーセンター

出席者：12名（五十音順、敬称略）

小松理恵（仙台市立病院 看護師）

櫻田翔子（宮城教育大学 大学院生）

菅井裕行（宮城教育大学 教授）

瀬藤乃理子（甲南女子大学 准教授）

高田哲（神戸大学 教授）

高橋聡美（つくば国際大学看護学科 教授）

武山裕一（株式会社アライブ 社長）

田中総一郎（宮城県拓桃医療療育センター 小児科医療部長）

中井靖（川崎医療短期大学 臨床心理士）*文責

中塚志麻（神戸市立友生支援学校 教員）

西田正弘（子どもグリーンサポートステーション「てとてとてとて」代表）

福地成（みやぎ心のケアセンター 小児科医）

挨拶（高田先生）

障害のある子どもは災害時にいろいろと危機に直面する。阪神大震災時にも、いくつか提言があったが、情報の整理や共有が不十分である。また、海外の震災でも同様の問題があるので、情報を発信していく必要がある。実際の支援は地元の方々が担うことになると思うが、周りからどうやって応援できるかを考えていきたい。



高田先生より挨拶

1. 発表：高田先生

「災害発生後の健康管理上の課題－特別な支援を必要とする子どもたちへの対応や心理的支援－」

- ・阪神大震災時の調査結果（子どもの症状と自宅被災状況との関連、両親のストレス等
 - ・インドネシア・ジャワ島地震における障害のある子どもへの支援活動
- 神戸市の協力による Children House の設立および運営
- ・あらゆる専門家の協力が必要



高田先生

2. 発表：菅井先生

「重症児の防災指針－3.11の経験から－」

- ・子どもは慢性的な運動不足→特に、身体障害のある子どもは機能低下が著しい
- ・子どもはイライラし、自傷行為が増える
- 保護者は自分の生活を守っていくことで必死なので、子どもにまで手が回らない
- ・支援のニーズを「取りに行く」という姿勢が必要
- ・全般的に危機管理策（災害マニュアル）の見直しが始まっている
- ・学生による支援活動→保護者から「勉強を教えてほしい」…実際にはトランプ等
- ・情報障害（どこに、どうやって尋ねればいいのか）
- ・親が震災の話題を避ける（タブーの問題）
- ・地域のつながり（助けようとする意識の共有）

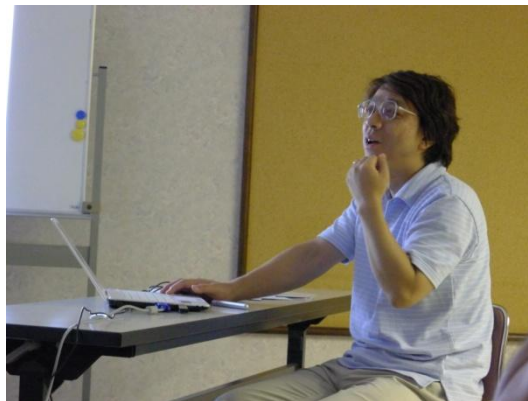


菅井先生

3. 発表：田中先生

- ・医療と生活の両方の支援が必要
- ・安否確認の電話は「電話の向こうも、こちらも安心」
- ・障害のある子どものことをもっと知ってもらえると、「災害弱者」が消えるのでは
- ・支援を受けたい人と支援したい人とのコーディネートが必要
- ・医療情報のメモを常時身につけておく
- ・福祉事務所を障害児者向けと高齢者向けの2種類に分ける
- ・ニーズを現場に取りに行く
- ・書籍『発達障害児の防災ハンドブック』（クリエイツかもがわ）

- ・近所の人に「ちょっとした支援」をお願いしたい



田中先生

菅井先生へ質問：中井

「避難所での学生ボランティアの運営について、どのような経緯があったか」

- ・学生を2泊3日で交替し、避難所までの送迎は教員がした
- ・大学が機能しなかったため、有志の教員数名で行った（教員ひとりでは難しい）
- ・「何かしたい」という思いを支援に結びつける役割が大切

→今回は菅井先生が有志で立ち上がってくださったが、別の場所で起きた場合にどの立場の人が担うのか、常設すべき役割なのかを検討することが今後の課題

- ・地域の方は避難所で障害のある子どもと会い、「変わったこともするけどかわいい」

高橋先生

- ・学生ボランティアの中で2名が自殺した→バーンアウト等の研修が必要

4. 発表：武山先生

「電源の確保ー3.11を経験してー」

- ・患者さんから「バックアップ用の電気を充電していなかった」
- ・テレビから情報が得られれば自宅で待機したい（ラジオより情報が詳しかった）
- ・外部電源使用について「医療機器に使用しないでください」とある

→通常の使用方法ではないことを自覚する

高田先生

- ・阪神大震災時、酸素使用患者の情報を、医療側は知らなくてもメーカーは知っていた



武山先生

5. 発表：西田先生

「子どものグリーフサポート」

- ・子どもにとって「死」が身近になり、不安感が強くなった
- ・親の死は注目されやすいが、祖父母やきょうだいの死は見落とされがち
- ・「ひとりじゃない」に気づくことが大切
- ・「関連死」の遺児への支援をどうするか（問題意識が弱い）
- ・阪神大震災時は遺児支援の意識が弱い（現在も）



西田先生

6. 発表：瀬藤先生

「被災地の遺族支援の課題－被災地での1か月で見えてきたもの－」

- ・JDGS（Japan Disaster Grief Support Project）では現地の人ができない支援を
- ・県による支援の違いがある
- ・福島の人には怒っている（外部へ転居した人←転居した人に支援金が出る）
- ・子どもは「非日常の特別なこと」に飽きている
- ・認知症の悪化によるトラブル
- ・「こころのケア」への抵抗感
- ・被災者の集まる機会を作っているが、暗い方向へ行き、支援できている感じがない
- ・毎日のように支援者が訪問するが、要求が叶うのが2ヶ月後
- ・傾聴の「喪失や悲嘆」に関する知識を身につけるべき→研修の必要性



瀬藤先生

質問：高田先生

「阪神大震災と東北大震災の違いは」

高橋先生

- ・阪神大震災と異なり、死者数が大規模で、どのように支援するかが現在も課題
 - ・マスコミに注目され、高額の支援金が割り当てられた
- もらえた、もらえなかった等のトラブルあり

福地先生

- ・専門家が「専門性」を強く出すと、周りが引いてしまう

質問：中井

「専門性を弱めるために具体的にどうするのか」

福地先生

- ・例えば、名刺を3種類（職名あり、職名なし、英語表記）
- まず「職名なし」で話し、会話の中で「医師だったのか」となる

高橋先生

- ・普段は専門家のオーラを消すが、必要なときには専門性や「専門家」の肩書を使う



質疑応答時

挨拶：高田先生

- ・中長期的な支援が必要であり、支援の仲間を広げていきたい
- 今回で終わらず、このような機会を神戸でも開きたい



高田先生より挨拶

以上